

# アメリカフウロソウとゲンノショウコ

2005年5月



(写真 1) 新大宮バイパス側道(四葉)のアメリカフウロソウ

ゲンノショウコは「現(または験)の証拠」と書かれるほど、速効性の健胃整腸薬(乾燥したものを煎じて飲む民間薬)として古くから知られているが、最近では草地や道端で似た草をよく見かけのは、大抵アメリカフウロソウですね。本物のゲンノショウコは全国的に減っているようだ。どちらもフウロソウ科で性状もそっくりだが、主な見分け方は次のようになる。

葉はどちらも掌状ですが、3~5裂する切れ目が深く、裂け目が広い(小葉の部分の幅が狭い)のが外来種です(芽生えたばかりの幼い時の本葉は大変よく似ている)。花(5弁)はアメリカフウロソウの方が1センチ以下とゲンノショウコより小さく、白くて花弁の先がやや平らに見える。ゲンノショウコの花は赤紫から白まで色々あり(西日本では赤系が多く東では白が多い由)、花弁の形や重なり具合なども多様です。花期はアメリカフウロソウの方が早く4月からで、ゲンノショウコは7月以降のようだ(交雑種があ

るのかゲンノショウコに似た葉や花の形のもので5月に咲くものが見られる・写真2)。



(写真 2) ゲンノショウコの葉だが5月10日に咲いた株(赤塚植物園[万葉植物園])

フウロソウ科の植物は780種もあり、国内の各地の気候に適応した野草となって、フウロの名の種が自生しており、外来種では野草のアメリカフウロの他に園芸種の各種ゼラニウムやペラルゴニウムなど広く栽培・鑑賞されている。ペラルゴニウムもゼラニウムもフウロソウ科の総称(英語名)でゲンノショウコもゼラニウムの一種になる。

ゲンノショウコは広く親しまれて来たため各地に別の呼び名があり、タネの尖った鞘(蒴果)の下が裂け、天辺を支点に5枚の殻が捲りあがる形が神輿の屋根に似ているので、全国的にミコシグサがあり、その他に薬効からイシャイラズ・イシャダオシ・テキメンソウ・タチマチグサ・ゲリドメ・セキリグサなどが、植生からイタチグサ(匍匐性)とかネコアシ(葉)などの名前がある。因みにゼラニウムの和名は天竺葵。



(写真 3) 赤塚植物園 (万葉植物園)のアメリカフウロソウ

フウロソウ科の植物には、全てに同じ薬効成分が含まれているが、ゲンノショウコ以外は少ないため薬としては利用されない。若葉は食べられる(白和えや天ぷら)そうだが、繊維が硬いので細かく刻む必要があり、有毒のトリカブトなどに似ているので、山で食べるには細心の注意が必要だ。

アメリカフウロソウは名の通りアメリカ(カロライナ州)から、ゼラニウムは南アフリカからきたものだが、とも水はけがよく日当たりのよい乾燥地を好むが、条件の悪い所で

も育つ丈夫な植物だ。園芸種は寒さに弱いが、アメリカフウロソウは耐寒性があり、多年生で他の草が枯れている早春から生育し、雑草の中でも立ち上がるなど繁殖力は旺盛で、あまり目立たないがセイヨウタンポポや、アメリカセンダングサなどと同じように繁茂しているようだ。

(猪鼻昭二)